

アケボノクラゲ *Chiarella jaschnowi* (Hydrozoa Anthomedusae) の

長期飼育

○笠川宏子・小谷野有加（新江ノ島水族館）

Dhugal J. LINDSAY (JAMSTEC), 三宅裕志（北里大学）

新江ノ島水族館は2004年より、JAMSTECと「深海生物の長期飼育に関する共同研究」を行っており、その一環として本研究ではアケボノクラゲ *Chiarella jaschnowi* の長期飼育を試みた。本種は、中・深層に生息するヒドロクラゲ類の一種であり、2004年に三宅らによって日本初記載となった。しかし、餌や捕食者に関する知見はなく、その詳しい生態は不明である。本研究では、長期飼育を目的として、本種の生態、特に飼育継続に必要な食性について調べた。ここでは、飼育下で観察された本種の餌の選択性および飼育記録を報告する。

2012年3月10日に北海道南西沖海域において、無人探査機「かいこう7000II」（支援母船「かいいい」）を用いた調査潜航（KR12-07 航海・第549潜航）が行われた。本海域において、水深702m、723m、810m、851m、907mにて、本種が確認された。本研究で飼育した個体は、水深702mにおいてスラップガンを用い採集された1個体である（傘高32mm、傘幅29mm）。船上では、容量500mlのサンプル瓶に収容して水温は約2.0℃を保った。下船後、水族館では、400×450×450mmの水槽に収容し、外部式ろ過循環装置を使用して、水温約2.0℃、pH7.9、塩分35.0をほぼ維持した。特に遮光等はせず、蛍光灯照明の下、飼育を行った。餌料として、クラゲ飼育で一般的に用いられるアルテミア *Artemia* sp. ノープリウス幼生、ギヤマンクラゲ *Tima formosa*、ウリクラゲ *Beroe cucumis*、冷凍保存されたイワシ類の稚魚のミンチ、冷凍保存されたホッコクアカエビ *Pandalus borealis* のミンチ、冷凍餌のコマセアミ類の一種、本種と同海域にて採集したカイアシ類の一種 *Neocalanus cristatus*、活きたイサザアミ類の一種を用意し、日を追って順に給餌を試みた。必要に応じ、一時的容器へ移動させ、スポイトやピンセットを用いて本種の口触手に向かって直接給餌を行い、摂餌の様子を観察し、ビデオで記録した。胃腔内への取り込みを確認したところで摂餌したと判断し、数時間後に消化したかどうかを確認した。

本個体は4月10日に拍動の停止が確認されたため、飼育期間は32日間であった。口触手や触手瘤の色が変わるなどの変化は観察されなかったが、全体的な収縮が見られた。飼育期間中、給餌は2日に1回、15回行い、イワシ類の稚魚、コマセアミ類の一種、カイアシ類の一種、イサザアミ類の一種の摂餌・消化を確認した。その他のものに関しては、触手、口触手ともに反応を示さず、摂餌は観察されなかった。また、本個体の触手および口触手を光学顕微鏡（400倍）で観察したところ、2種の形態の異なる刺胞が見られた。未射出時の触手の刺胞は、長径8μm、短径6μm、口触手の刺胞は長径10μm、短径5μmであった。

これらの結果から、本種には餌生物に対する選択性があると考えられる。本種が採集された海域では、ヒドロクラゲ類や有櫛クラゲ類、アミ類などが多数確認された。クラゲ類の中には、好んで他のクラゲを捕食する種類もみられるが、本種は自然界においてアミ類やカイアシ類などの甲殻類を好んで捕食していると推測される。また、触手や口触手にある刺胞のタイプもそれに合った性質のものであると考えられる。